

## 津島佑子の文学 —物語と記憶—

川原塚 瑞穂

### 0. はじめに

津島文学においては、夢と現実、過去と現在が入り乱れるマジック・リアリズム的手法がよく見られる。特に、時を越えた物語の融合という超自然的描写が、物語のなかで重要な役割を果たしていることが多く、融解する時の中でさまざまな関係性が編み直され、問い直されていく。そこで特徴的なのは、説話や古典文学など、さまざまな古の物語が語り直されることによって現実が再構成され、重層的に物語が織り込まれていくことである。そして、その効果が存分に生かされた作品の一つが、今回取りあげた『ナラ・レポート』(文藝春秋、2004.09)という小説である。

津島佑子は1947年、父津島修治(小説家太宰治)、母美智子の次女として東京に生まれ、白百合女子大学在学中に小説を発表し始めている。幼くして父や兄を失い、また後には長男を亡くすという不幸を経験した彼女の小説においては、不在の父、知的障害を持つ兄とその死、子どもを失った母の痛みといったモチーフが頻繁に取り上げられる。「人間は生の中に死を抱えている」<sup>1</sup>というのは彼女自身の言葉であるが、この言葉からも、身近な人の死を抱えて生きていく人生というものが、津島文学において非常に大きなテーマであることが窺えるだろう。

『ナラ・レポート』は、幼くして母を亡くした少年の物語である。簡単にあらすじを紹介しておこう。主人公の森生(モリオ)は12歳。2歳の時に母親を亡くし、父はもともと別の女性と結婚していたため、父方の祖母に預けられ奈良で育てられている。見捨てられた、「ナラ」に閉じ込められたという思いを強く持つ森生は、様々な試みの末、母の魂を呼び出すことに成功し、ハトの姿を借りて現れた母に大仏を破壊してもらう。

その大仏破壊をきっかけに、森生と母の魂の、時を超えた旅が始まる。母と森生の物語は、中世の説話や説経節などとリンクし、あるときはキンギョ丸と母アコウ、あるときはアイゴとイタチの母、またあるときはアイミツ丸と母トランなど、何度もくり返し母と子としての生を、そしてまた別れを経験していく。

やがて我に返ると、静まりかえった大仏殿の中に森生は一人たたずんでいた。目の前には大仏が存在していたが、頭蓋骨が灰色にくすみ、肋骨が浮かんでみえ、腕と手も骨と化した変わり果てた姿であった。

以上が『ナラ・レポート』のあらすじである。亡くなった母とその息子の魂が、中世の様々な母子の物語に転移していき、その中で母を喪失した少年の痛みからの回復が図られる、という構成になっている。

### 1. 大仏の破壊と物語の解放

2歳で母を失った森生は、「自分の母親がぽっかり開いた穴としてしか存在しないのは、ひどく不当なことだ」と憤りを感じていた。母の記憶を持たないということは、母に愛される自分という幸福な物語からの疎外であり、母の喪失は、自分を受け入れてくれる世界の喪失と同じである。森生は次のように語っていた。「だからナラがいけないんだ。そうしか言えない。ナラはぼくを認めないし、ぼくもナラを認めない。」

そして、森生にとって大仏は、自分を圧迫する世界であるナラの象徴だったのである。森生は「あの太仏はぼくみたいな逃げ場のない人間たちを、アリか、ハエのようにしか見ていない」と語っていた。ここでは大仏は、威圧的で庶民を圧迫する宗教的権威、政治的権力の象徴にほかならない。だからこそ、森生は息苦しさの根源である大仏を破壊することを母に願ったのである。

また、森生の母に言わせれば、奈良は「大昔に死んだ人たちの呪いがどこに行っても地中から聞こえてくるところ」であり、それらの呪いに蓋をし、時間の流れを止めてしまったのが大仏だった。そのような封印である大仏を破壊することによって、閉じ込められていた声が溢れ出し、母と森生は時を超えた旅に出ることになる。権力者によって編まれた、強者にとって都合のよい歴史ではなく、そこから零れ落ちてしまった声、正史に収まりきれない記憶のかけらを呼び出し、そこに弱く力を持たない子どもである森生と母の生が重層的に重ねられていくのである。

### 2. 時間を超えた母子物語との連鎖

二人の魂は、奈良という土地を磁場とした中世の様々な母と子に転移していく。それは輪廻転生といった、生まれ変わりの類とは少し異なる。未来の話が過去の記憶のように語られたり、森生としての意識を保っているようで、ときにそれさえもおぼろげになったりして、時間の軸が失われているのである。「遠い未来の昔へ」という文中の言葉が示しているように、それは過去のように未来でもあり、かつ現

在でもあるという、直線的な時間の流れとは無縁の「記憶」の積み重ねなのだ。

——ねえ、お母さん、ぼくたちはこれから二人で思い出さなければいけないんだね。なにがどのように起こったのか、記憶はひとつだけじゃないということ。

——そう……。今のわたしたちはふたりとも、いつかどこかで死んだことのある身。これからもさらに死をくり返し、そのたびに、記憶が重ねられていく。やがて見分けがつかなくなり、記憶の渦から逃げ出したくなる。でも、それは許されない。わたしたちは母と子として、いつだったか、この世に生きていた。その意味を、私たちは見つけなければならない。

——意味なんてなにもなくても、たがいに追い求めずにいられないという意味……。

この会話からは、ひとつだけではない「記憶の渦」から、母と子として生きる意味を見つけ出そうとしている様子が読み取れるだろう。記憶とはどこかに貯蔵され検索されるようなものではなく、「現在の前後関係や情動によって、現在に適合されるように築かれる現在であり、現在に適合されるように築かれる過去」であるという<sup>2</sup>。さまざまな物語の連鎖の中で、母と子が「たがいに追い求めずにいられないという意味」を浮かび上がらせながら、物語の語りと同時に森生の記憶は今まさに構築されつつあるのだ。

このような時間を超えた旅によって、自分は確かに母の子であり、いつの時も母に求められていたのだということを記憶がないままに「知った」森生は、もはや世界に拒絶され、世界を拒絶する孤独な子どもではない。最後の場面で、我に返った森生が見た大仏が骨と化していたのは、大仏がすでに森生を疎外する世界の象徴たりえないことを示しているにちがいない。

『ナラ・レポート』では、このようにさまざまに変奏される母子の物語を通じて、森生の、母を喪失した痛みからの回復が語られていたのである。

### 3. おわりに

津島文学において、時空を超えた物語の融合という手法は、『ナラ・レポート』に限らず頻繁にみられる。例えば、『夜の光に追われて』（講談社、1986.10）という小説では、9歳の息子を突然失った母の痛みが、およそ千年も昔に苦しみを抱えながら生きた女性の物語と共鳴し、死を抱えながら生きていく道が見出されていく。

また、『あまりに野蛮な』（講談社、2008.11）という小説では、1930年に台湾で起きた霧社事件（最大規模の抗日蜂起事件）が扱われており、「文明／野蛮」という近代的価値観のもと、「蛮行」と切り捨てられてきた霧社事件の記憶が、1930年代に台湾に暮らした日本人女性と、現在を生きるその姪の、時を越えた交流の中で語りなおされていく。

津島文学におけるマジック・リアリズムの手法は、過去に紡がれた物語や手紙などと現在を共鳴させ、物語を重層的に織り重ねていくところにその特徴を見いだすことができる。感情を重ね合わせ、記憶を積み重ね、歴史を語りなおす。正史や大きな物語のなかでかき消されてしまった声に耳を済ませ、そこに息吹を吹き込み、現在を生きる人々の生と交響させる。そうして豊穡な物語世界がひらかれ、今を生きるための力を秘めた文学が生み出されていくのである。

### 注

1. 「第12回よみうり読書 芦屋サロン」（「読売新聞」、2005.06.07）
2. 港千尋『記憶—「創造」と「想起」の力』（講談社、1996.12）